

# 令和2年度短歌講座 歌集



塩尻市中央公民館

## 令和2年度短歌講座を振り返って

毎年6月から翌年2月にかけて9回行っている中央公民館短歌講座です。昨年からの中央公民館主事の発案により、今回2冊目の短歌集を作成していただけることとなりました。

昨年も書きましたが、私の恩師である故・保科郁夫先生がかつてこの講座の講師をされ、続いて前中央公民館長・北澤智彦先生が講師をされ、令和元年度より私が受け持つこととなりました。若輩者の私を、講座の諸先輩方が温かく迎え入れてくださり、昨年も盛んに意見交換をしながら講座を行ってきました。

特に令和2年度の講座では、なるべくオリジナル作品を尊重して残すこととしました。どんなに添削を加えたとしても、その人の指先から生み出した文字そのものほど作者の心血が通ったものはありません。

ただし講座中は遠慮なく添削を行っています。時には受講生の皆さんからの添削もいただく時があります。様々な見方を学ぶ機会となります。実際に一堂に会して言葉を交わすからこそできることです。興味を持たれた方は、ぜひ実際に短歌講座にご参加ください。

そして、その講座の皆さんから生まれた短歌による歌集。是非一度手に取って、どこからでもパッと開いたところから読んでみてください。興味が持てたらその前後に目を通してみてください。さらに興味が沸いたら、最初から一通り読んでみてください。短歌づくりはいつでもどこでもできるのと同様に、短歌の読み方も色々あって楽しめば良いのです。

そしてさらに興味が沸いてきたら、ぜひ私たちと一緒に短歌を作りましょう！

四苦八苦

パソコン画面に

突然に

こ

孫や娘の顔

初オンライン

三密に

まぎれてくらす

あさはらに

閑古鳥元気

コロナ禍の街

隣り家の

軒端におよぐ

鯉のぼり

をまご

祝ふ男孫は

マンション住まい

青春と

老春の

語あり

あまりの落差

われは愕然

コロナ禍に

耐へて冬より

四か月

光の見へて

半夏生咲く

立ち竦む

我を追い越し

自転車は

青大将と

並びて行けり



コロナ禍の

注意と中止の

お知らせに

集金依頼を

のせて回覧

軒先の

賑やかすぎな

燕

コロナ禍中の

九ヶの巣作り

夏告げる

響き渡れり

カツコウの声

妻と長閑に

ラジオ体操

コロナの憂

未だ晴れなき

日日なれど

白鷺悠と

青空ゆきぬ

たちまちに

世界を覆い

焼き尽す

燎原の火の

勢い激し

春耕の

田の中機械の

後を追って

鴉何羽も

虫を食み居る

布切れと

自由時間は

たっぷりと

マスク作りを

楽しむ五月

コロナ禍で

外出自粛の

早朝に

畑に独り

種々種を蒔く



泣いてるの

怒つてゐるの

お互ひに

マスクの奥を

じつと見つむる

朴の花

泰山木に

山法師

木曾の谷間

真白き花々

このたびの

世界中をも

苦しめた

コロナと言う名の

地球の悲鳴を

少し派手

ためらいつつも

母の日の

百合の花柄

傘を下ろしぬ

立葵

八分目まで

咲き登り

梅雨よ一緒に

コロナ禍連れてけ

食卓に

所狭しと

茄子トマト

夏日差し浴び

家庭菜園

眠き目に

忙しく出でゆく

孫の乗る

始発電車の

消ゆる迄見る

ごみあくた

塵芥

果樹の枝木に

被さるを

払ひのけたり

無心の学徒



友からの

・  
・  
・  
・  
・  
・

おやすみなさいの

メールあり

軒端に歌ふ

雨のこもりうた

わが身さえ

自由にならぬ

ましてなお

コロナウイルス

駆逐は難し

片付けの

最中に手にした

アルバムは

パンドラの箱

開けてはならぬ

田圃みち

いつ眺めても

整然と

これぞ日本の

こころのふるさと

からすうり

白きレースの

花開き

レモンのような

実となる秋は

餌まきて

丸き動作に

微笑めば

頭つつかれ

転がる雀も

湖の

岸边に鴨の

群れあそぶ

蒼き穂高岳嶺の

尖り立つ見ゆ

笹原の

三峰山の

峰に立ち

膝痛の妻

富士をふりさく



電線と

同じ高さの

友の家

燕の顔が

間近に見ゆる

懐かしき

人に会いたり

初秋の

涼風うけて

跨線橋渡る

無人家の

カーテン閉まる

ガラス戸に

小さい蝙蝠

へばりついてる

馱ピアノノ

ダニ―ボーイ

流れゆく

パソコン開き

思ひに寄り添ふ

ひとり子を

有名私立に

入れし親

金がかかると

嬉しげにいふ

杳き日の

夏休み迎へる

ドキドキ感は

コロナの今年の

子等にはあるか

この夏は

そちこちの庭

テントあり

遠出をせずに

キャンプ気分を

来し方の

反芻の日々

庭先の

草むしりつつ

蟻に問ひをり



最期なる

時の不安は

消えねども

故人もみんな

たどりたる道

「およりて」の

響き優しい

方言に

飯田の友が

思い出される

家主なき

庭の南瓜は

伸び伸びと

垣根にその実

委ねて揺れて

健康は

唯一無二の

健康な

私生活からしか

生まれない

這ひ出でた

数多の穴を

地に残し

木立揺るがす

蝉の鳴き声

モカなのか

キリマンジャロか

朝早く

モダンな空気

新婚の家

コロナ禍の

ならひ

慣となりたる

マスク着け

かひだ

買出しに行く

七日振りなり

ただいまあ

ゆでえだまめに

塩を振り

祖母置きくれし

卓袱台の上



かぶと虫

少年はまだ

健在で

幸せさうに

西瓜を食みぬ

下校時の

危急の警報

とどろめき

畑にかくらふ

九歳の夏

果てしなき

心の数を

癒し来し

慰め来しか

北アルプスは

残暑中

三日三晩を

干した梅

夏ばて防止は

酸っぱく甘く

新緑の

中にたたたずむ

斎場に

故人の好みし

「古城」流るる

にこやかに

とも

旧友現れぬか

荒れはてし

庭に秋海棠の

花ひそと咲く

朝顔は

雨の朝には

空の色

晴れわたる日は

海の青かな

六年坂

御嶽山の

息を聴く

三角点は

灰に埋もれて



久し振りの

昼カラオケで

歌うたび

消毒をする

マイクタッチパネル

いえうち

家内に

迷ひ込みしか

こころぎ

蟋蟀の

声耳につき

幾度も寝返る

虫を引く

密なる蟻の

協力を

眺めて朝の

力をもらいぬ

鳩小屋を

飛び立ちゆきし

鳩の群れ

秋の青空

大きく廻る

暮方に

焼けつくような

蝉の声

森の木末は

まだ暑からん

還暦の

同級会で

胸キュン

恋のざわめき

ときめく心

背丈ほど

伸びたる草地に

子供等は

歓声あげては

草にひそみぬ

新潟へ

鱈汁食べに

行くと言ふ

ゆこゆこ行かう

夫の誕生日



夫の手を

摩ることなく

帰り来ぬ

漸く成りし

オンライン面会

原子力の

デンと構へる

出雲崎

禅僧 // 良寛 // の

生れしその地

吾の指の

傷口を見て

治ったねと

嬉しさうに

してくるる外科医

階段は

七百七十

マスクして

大汗かいて

琴平参り

つる草奴<sup>め</sup>

むやみやたらと

絡みつき

根を引き抜けぬ

吾をあざける

カメラが並ぶ

白樺峠の

夕力見の丘

青空高く

サシバが越へる

木蓮の、

花は嫌い  
と

言はれたる

師の影たゝしめ

もくれんは咲く

難病と

戦っている

幼な友

スマートフォンで

つながる命



朽の実の

ぽとんころころ

落ちる頃

紫苑秋桜

薄が揺れる

散歩道に

こぼれゐし種

拾ひ来て

庭の片すみ

蒔きて春待つ

免許証の

返納すませ

いわし雲

脚を信じて

てくたく帰宅す

不図止る

(茶色の小壘)

流れゆく

懐かしの友

思い出の街

温暖化

進む地球に

じわじわと

ゆだる蛙の

危機せまり来る

紅葉が

山から里へ

下りて来て

つい口遊んでる

「赤や黄色―」と

人事の任まけ

ほころび見えし

民主主義

国家の行方

違はず向かへ

人々の

希望の暮らしに

蓋をして

コロナは世界を

トンネルの中へ



夕焼けが

オレンジピンク

紫へ

色移りゆき

秋の日暮るる

濯ぎ物を

干しつつ蜻蛉の

群れ探す

この年見られず

神無月尽

気の置きぬ

仲間とたわい

ない事を

言って笑って

いつもの鮎屋

「十五夜」とふ

兄のメールに

返信は

歪む月見る

翌日となる

水澄みて

川底の石

透けて見ゆ

巴淵は

紅葉真盛り

阿寺ブルーの

巨岩の淵に

佇めば

河鳥吾を

上流へ誘ふ

三ヶ月

良く咲いたねと

讚へつつ

掌に受く

朝顔の種

会合の

お茶当番が

なくなりて

三リットルの

ポット置き去り



四方の山、

陽を受け輝よう

紅葉に

コロナの心

しばしやすらぐ

青々と

野菜育てし

菜園を

更地に片つけ

思ふはミレ―

父老いる

足裏のツボ

マッサージ

喜ぶ笑顔

涙止まらず

をぢさんのの

スマホの惑ふ

指先は

孫の画像を

出すためにある

根子岳の

裾野に広がる

笹原が

さざ波となり

手招きをする

境内に

降り積もりたる

もみじ

紅葉の葉

踏みしめる音

たしかめ歩く

舗装路を

右往左往と

ひざりば

乾反葉の

命もちたる

小鳥のように

うち続く

パンデミックの

黒雲を

払いたまえと

心経あげる



五十年前の

着物を

チュニツクに

リフォームしつゝ

はは

亡母を思いぬ

一枚の

刈られぬままの

田に残る

稲穂は折れて

冬に向かひぬ

シニシズム

蔓<sup>はむし</sup>り行きし

此頃は

三島由紀夫の

肉体美見よ

星の降る

見上げてみれば

銀の海

母は彼方に

瞬く光

朝霧を

肺いっぱいに

吸ひ込めば

内なる膿の

薄まりてゆく

長き夜

うつらうつらの

夢の中

祖母の笑顔と

囲炉裏の火影

近況に

ご自愛せよと

言葉添へ

友にお礼の

手紙したたむ

此処かしこ

熊出没し

里荒らす

呉れてやりたし

成り年の柿



お向かひさんと

暮らしのルール

異なりぬ

間の道路は

市と市の境

千葉の兄

後部座席に

トランクに

信州リンゴ

山と積みゆく

夕映えに

尊嚴保ちて

御嶽山

幾多の命

鎮め暮れゆく

空ぬけて

ひと葉ひと葉の

音を踏む

地球に積みゆく

落ち葉ふみゆく

コロナ菌

治まるどころか

二波三波

襲ふも防具は

手洗ひマスクとは

落ち葉踏み

鳥居峠と

馬籠越え

江戸の旅人に

思いを巡らす

あああの子

どこで会つたか

親愛の

笑顔浮かべて

会釈してゐる

“サイタサイタ”

新感染者の

数最多

コロナ報道の

メディアは踊る



暗やみの

山のふもとに

まばたきの

車のライト

生活有りか

一年の

作業を終えた

休み田に

今朝は大霜

銀色光る

ぺつたんと

杵振り下ろす

二十歳らの

無垢なる顔に

戻る年の瀬

雪かとぞ

まがうばかりに

霜降りて

畑じまいの

野沢菜を採る

この年の

汚れは明日に

持ち越さじ

彼是集めて

晦日の洗濯

新春の

クロスワードを

完成し

投函に行く

初ウォーキング

年取りは

芋汁が良しと

千葉の兄

好好爺さん

好き勝手なり

「おはよう」と

緑色のジャンバーの

少年が

ペタルこぎつっ

すれ違う朝



物忘れ

する吾と

忘れ物多き

孫に家族は

振り回される

柿落葉

搔き集めてる

手の先に

引き起こし待つ

埋もる寒菊

七並べ

婆々をたくみに

つかいおり

勝気の妻は

孫を泣かせる

太陽の

恵みを戴く

初春の

風に向ひて

よいしよの一步

箱根路を

タスキが躍る

下剋上

逆転劇に

視線くぎづけ

その人の

年賀状が

届きしは

一月一日

逝きて三日目

はねつきを

せしあの頃の

思ひ出は

雲のかなたへ

消へてゆくなり

娘の棚に

題名『モモ』を

見つけたり

コロナ禍のもと

夢に会ひたし



「獅子の絵は

丑三つ時に

踊り出す

」

壁を指さし

祖母は言ひけり

散歩道に

誰も拾はず

何日も

端にころがる

汚れしマスク

悠々と

庭を横切る

野良猫が

軒下小走り

雪積む朝

このままに

活躍する日は

もう無きと

道路に落ちたる

軍手語りぬ

昭和史より

反戦への道

説き続け

半藤一利

惜しまれ逝きぬ

とりインフルの

ニユーース寒む寒む

観る朝

地中深きへ

化石と成りゆく

大寒の

空へ向つて

登りゆく

剪定木を

焚く青煙

冬至すぎ

日脚が伸びた

好日も

真冬近しと

心ひきしむ



紅と白、

蟬梅咲き初む

座光寺の

石段一歩

一歩と幼な

口ウ梅の

咲き始めたる

散歩道

元気もらひて

もう一廻り

孫が来る

鬼滅の塗り絵

用意して

時計を見つめ

ピンポーンを待つ

淡雪の

間に青菜

摘む指を

あした

朝の風が

紅に染む

房総の

土産の『菜の花、

フリージア』

へやぬち

温き部屋内、

ほのぼのと春

新人が

先頭に滑る

ラインスキー

ヨコヅナイワシの

重圧を思ふ

年明けて

尚のさばりし

コロナ禍に

よひ

あか

吉事の証し

春花の咲く

三九郎の

やぐらのだるま

はじけとび

疫病神が

そら

宇宙に逃げゆく



時代から

外れてゆくね

現金で

買い物するを

手放せなくて

「鬼は外

コロナ禍消えろ

福は内」

気持ちを込めて

豆まきをする

花札の

ルールが我が家と

違ふぞと

夜遅くまで

語り合ふ友

## あとがき

塩尻市中央公民館短歌講座の歌集ができあがりました。昨年度、1年間の講座のまとめとして、初めて歌集を作成しました。今年度の歌集が第2号となります。

令和2年度は、コロナウィルスの感染拡大により6月の講座が中止となり、全8回の講座開催でした。このような状況の中ではありましたが、受講生の皆様には、熱心に受講していただきました。一層学びを深めることができたのではないかと思います。この歌集は、そんな皆様の1年間のまとめとして作成いたしました。

本講座の講師、藤森 円先生には、一首一首について、丁寧にわかりやすくご指導いただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。この歌集を、今後に役立てていただければ幸いです。

令和3年6月 中央公民館長 赤津 勝広

**令和2年度短歌講座 短歌集**

編集・発行 塩尻市中央公民館

発行日 令和3年6月

お問合せ 中央公民館

電話：0263-52-0899